2015－2016年度
国際ロータリー第2690地区　第3・第4・第5グループ合同

Intercity Meeting Report

「温故知新」－出雲文化がロータリアンに託すもの－

と　き：2016年2月28日（日）
ところ：ビッグハート出雲
　　出雲ロイヤルホテル

ホストクラブ　出雲中央ロータリークラブ
コ・ホストクラブ　出雲ロータリークラブ
コ・ホストクラブ　大社ロータリークラブ
コ・ホストクラブ　出雲南ロータリークラブ
コ・ホストクラブ　平田ロータリークラブ

Rotary

2015～2016年度
国際ロータリー 第2690地区 第3・第4・第5グループ合同

インターシティ・ミーティング　プログラム

テーマ 「温故知新」―出雲文化がロータリアンに託すもの―

■と　き　2016年2月28日（日）
■ところ　ビッグハート出雲
　　出雲ロイヤルホテル

12:15～13:00　**登録受付**

13:00～13:50　**開会セレモニー**　　司　会　**内田政智**

開会点鐘	第4グループガバナー補佐	**岸　篤彦**
開会宣言	第3グループガバナー補佐	**米田則雄**
国歌並びにロータリーソング「奉仕の理想」斉唱	ソングリーダー	**廣原俊平**
ガバナーおよび来賓紹介	第4グループガバナー補佐	**岸　篤彦**
参加クラブ紹介	第5グループガバナー補佐	**高橋和男**
主催者挨拶	第4グループガバナー補佐	**岸　篤彦**
歓迎の挨拶	ホストクラブ会長	**池淵俊雄**
ガバナー挨拶	RI第2690地区ガバナー	**佐藤芳郎**
表彰・感謝状贈呈	RI第2690地区ガバナー	**佐藤芳郎**

13:50～14:05　**休　憩**

14:05～15:30　基調講演

講師紹介	ホストクラブ会長	池淵俊雄
講　演	NPO法人出雲学研究所　理事長	藤岡大拙 氏

演題　「出雲文化について－その特質と有用性」

謝　辞	ホストクラブ会長	池淵俊雄

15:30～15:50　閉会セレモニー

ガバナー講評	ＲＩ第2690地区ガバナー	佐藤芳郎
次期ガバナー補佐紹介	第５グループガバナー補佐	高橋和男
次期ガバナー補佐挨拶	次期第３グループガバナー補佐	石倉貞昭
	次期第４グループガバナー補佐	渡部　孝
	次期第５グループガバナー補佐	岡﨑政助
閉会宣言	第３グループガバナー補佐	米田則雄
閉会点鐘	第４グループガバナー補佐	岸　篤彦

15:50～16:30　会場移動

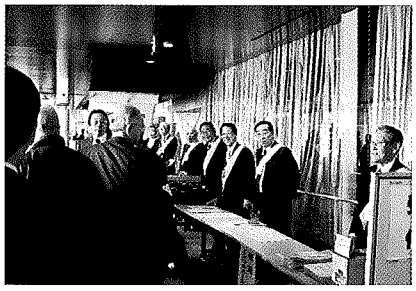
16:30～17:50　懇親会

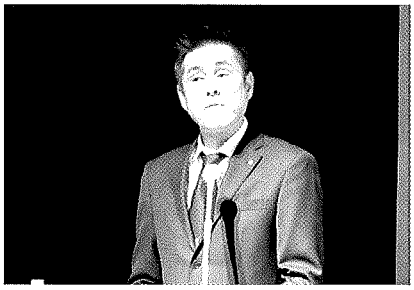
司　会　北脇樹二

開宴挨拶	ＩＭ実行委員長	古瀬倶之
乾杯	ＲＩ第2690地区ガバナー	佐藤芳郎
食事歓談		
閉宴挨拶	ＩＭ副実行委員長	山根一生
ロータリーソング「手に手つないで」		
	ソングリーダー	廣原俊平
万歳三唱	パストガバナー	山本茂生

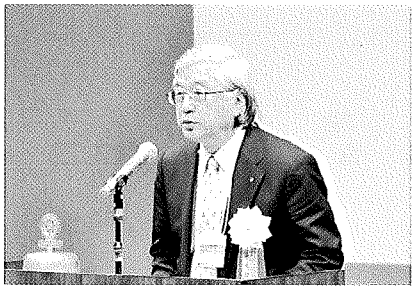
開会セレモニー

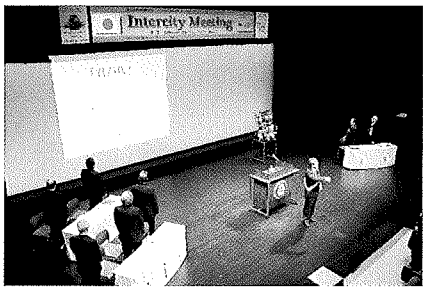
	司　会	内田政智
開会点鐘	第4グループガバナー補佐	岸　篤彦
開会宣言	第3グループガバナー補佐	米田則雄
国歌並びにロータリーソング「奉仕の理想」斉唱		
	ソングリーダー	廣原俊平
ガバナーおよび来賓紹介	第4グループガバナー補佐	岸　篤彦
参加クラブ紹介	第5グループガバナー補佐	高橋和男
主催者挨拶	第4グループガバナー補佐	岸　篤彦
歓迎の挨拶	ホストクラブ会長	池淵俊雄
ガバナー挨拶	RI第2690地区ガバナー	佐藤芳郎
感謝状贈呈	RI第2690地区ガバナー	佐藤芳郎


受　付

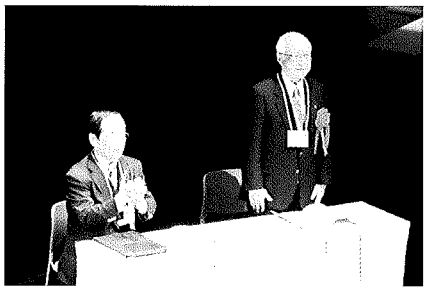

司　会

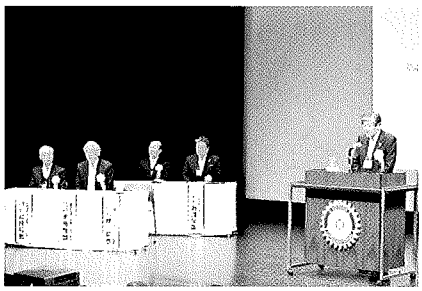
開会点鐘

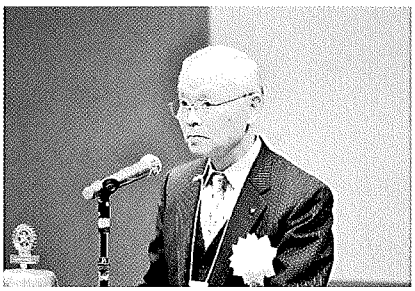

開会宣言



国歌並びにロータリーソング「奉仕の理想」斉唱




ガバナーおよび来賓紹介


参加クラブ紹介

主催者挨拶

国際ロータリー第2690地区
第４グループガバナー補佐
岸　　篤　彦

皆様方、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました第４グループガバナー補佐の岸 篤彦でございます。2015－2016年度国際ロータリー第2690地区第３・第４・第５グループ合同インターシティ・ミーティングの開催にあたり、主催者を代表いたしまして一言ご挨拶を申し上げます。

皆様ご存知のとおりこの出雲の地は古事記、出雲国風土記にみられます様に神話の舞台、神々が集われる地と言われております。折しも、出雲大社では平成の大遷宮と言われる60年ぶりの社殿の修造、改修が執り行われています。この様に、古代から連綿と引き継がれた神々しい風土、格式と伝統のあるこの出雲の地に、佐藤芳郎ガバナーをお迎えし、山本茂生パストガバナーのご臨席を賜り、また県内の15クラブから多数のロータリアンの皆様方にご登録とご参会いただき、斯くも盛大にＩＭを開催できますことを、主催者といたしまして心から感謝申し上げる次第でございます。

本年度のインターシティ・ミーティングは、第４グループの担当となっております。第４グループは、出雲クラブ、大社クラブ、出雲南クラブ、平田クラブ、そして出雲中央クラブの5クラブで構成されております。その中で、今回、ホストクラブを出雲中央ロータリークラブに引き受けていただき、また、第３グループの米田ガバナー補佐、第５グループの高橋ガバナー補佐の皆様にも、ご理解とご協力をいただく中で本日のＩＭを開催することが出来ました。

さて、インターシティ・ミーティングは、申すまでもなく、ロータリアンの学びの場であり、親睦の場であると言われております。そこで、学びの場といたしましては、「温故知新」－出雲文化がロータリアンに託すもの－というテーマの下、郷土の歴史の語り部であることを信条とされております藤岡大拙様をお迎えし、「出雲文化について－その特質と有用性」というテーマでご講演をお願いいたしているところでございます。

藤岡様のテーマにありますとおり、悠久の歴史をもちます出雲文化の特質と有用性について、この機会をとおして学んでいただき、ロータリアンとして、ロータリーの奉仕活動にどの様に生かしていくことができるのか、その手立てを探しあてていただき、併せまして親睦の場としまして、佐藤ガバナーが提唱されております「あいことばはＥｎｊｏｙ　Ｒｏｔａｒｙ」その実践をしていただき、皆様方にそれぞれ親睦の輪、友情の輪を広げていただく、その様なＩＭにしていただければと願っているところでございます。

結びといたしまして、本日のＩＭがご参会いただきました皆様方にとりまして、実りの多い、有意義なものになります様、心よりお祈り申し上げまして、ご挨拶とさせていただきます。

どうか今日一日よろしくお願いいたします。

歓迎の挨拶

出雲中央ロータリークラブ
会　長
池　淵　俊　雄

皆様方、こんにちは。神々が集う神話のふるさと出雲にようこそお越しいただきました。2015－2016年度国際ロータリー第2690地区第３・第４・第５グループ合同インターシティ・ミーティングを開催いたしましたところ、佐藤ガバナー、山本パストガバナーをはじめ多数の皆様にお出掛けいただき、本当に感謝申し上げます。コ・ホストクラブの皆様の全員登録をはじめ、県内の７割近いロータリアンにご登録をいただきました。併せて御礼申し上げますと共に、皆様のお越しを出雲中央ロータリークラブ会員一同、心より歓迎申し上げます。

この出雲は出雲大社の大遷宮以来、大変賑わっております。先人たちの遥か悠久の時を超えた想いが、今なお私たちの様々な分野で恩恵をもたらしてくれることに、心より感謝と敬意を捧げずにはいられないところでございます。

本日のＩＭはテーマを「温故知新」－出雲文化がロータリアンに託すもの－とさせていただきました。先人たちの生き様を改めて見つめ直して、ロータリアン一人一人が、地域の未来のために何が出来るかを考えられる場になれば良いと思っております。

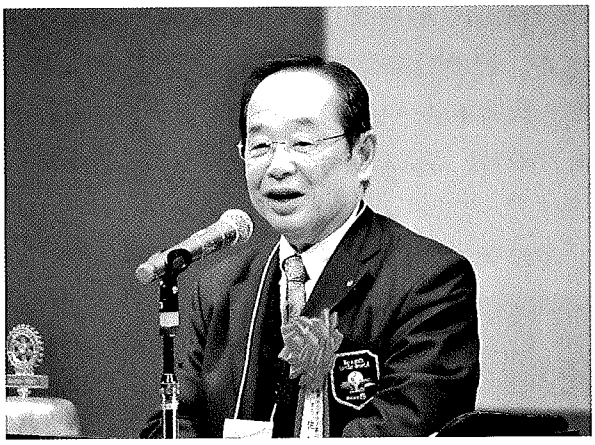
後ほどの基調講演は、ＮＰＯ法人出雲学研究所理事長藤岡大拙様にお願いしております。経済の発展のみならず、真の豊かさとは何か、そして我々はこれからどう生きるべきか、そのヒントが先生のお話には隠されているものと思います。どうぞ皆様ご期待いただければと思います。

会議終了後、皆様には会場移動でご不便をお掛けいたしますが、我々会員一同おもてなしの精神で、出雲らしい精一杯の懇親の場を設けさせていただいております。ロータリアンの交流の場として大いに活用していただければ幸いに存じます。

最後になりますが、皆様方のご健勝とロータリークラブの発展を祈ると共に、本日のＩＭが皆様にとって実り多きものとなりますこと、そしてガバナーが仰せられる、記憶に残るＩＭになりますことを念じまして歓迎の挨拶に代えたいと思います。

本日は最後までどうかよろしくお願いいたします。

ガバナー挨拶



国際ロータリー第2690地区
ガバナー
佐　藤　芳　郎

皆さん、こんにちは。今日は第３・第４・第５グループ合同インターシティ・ミーティングをこの様に盛大に行われますことに、まずもってお慶び申し上げます。

インターシティ・ミーティングとはご存知のようにロータリーの正式行事では無くなりましたが、当地区ではかねてよりガバナー補佐を中心に勉強の場、あるいは懇親の場として開催していただいております。特に私の年度は是非、開催をしてくださいとお願いいたしました。今日はしっかり勉強して、皆さんと懇親を深めて、明日からのロータリー活動の糧にしていただきたいと思います。

今年のラビンドランＲＩ会長は年度テーマとして「世界へのプレゼントになろう」と掲げておられます。それを実践するには、皆様方がロータリー活動に是非とも積極的に参加していただいて、奉仕をし、親睦を高め、相互理解を深め、最後はロータリーを好きになってくださいとお願いしようと思って「あいことばはＥｎｊｏｙ Ｒｏｔａｒｙ」と提唱させていただきました。今日もＥｎｊｏｙ Ｒｏｔａｒｙの延長線でがんばって、色々勉強していただければ有難いと思います。

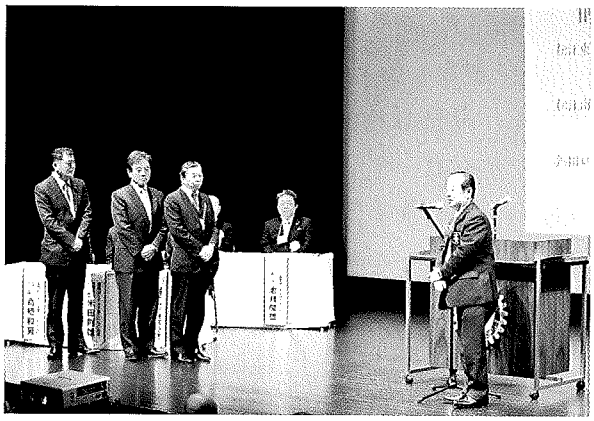
今日は私の大変尊敬する松本祐二パストガバナーが欠席です。理由は、第2640地区、和歌山の地区大会にＲＩ会長代理として赴かれておられます。大変名誉なお役目です。今日は松本パストガバナーの分まで一緒にしっかりと、皆さんと懇親をして帰りたいと思っております。

既に本年度、３分の２が終了してしまいました。年度の最初に計画された行事、あるいは「世界へのプレゼントになろう」に対する行動を実行され、着々と実績を上げられていると思います。そのようなクラブ、あるいは個人におかれましては、このあと３分の１、４ヶ月も引き続き、良いロータリー活動を続けていただければと思います。もしまだ、あまり実績が上がっていなかったり、計画が上手く進んでいないところがございましたら、まだ４ヶ月もあります。この４ヶ月の間に是非とも実績を上げていただいて、皆様方お一人お一人、あるいはクラブにとって「記憶に残るよい年度」にしていただければ誠に嬉しく思います。そしてクラブの重要な歴史の一ページをつくっていただいて、それを重ね、クラブの文化をつくり上げてください。

今日のＩＭが、皆様方のロータリーを活動するにおいての良いきっかけになることを祈念いたしまして、私のご挨拶に代えさせていただきたいと思います。

どうもありがとうございました。

個人奉仕表彰



今年は各クラブ、各グループで素晴らしい会員の方を表彰させていただこうというアイデアを出しました。表彰します3名の方はそれぞれのグループのガバナー補佐からご推薦いただいております。

これから表彰させていただきます。

「貴殿は、ロータリーの奉仕の理念を実現すべく、超我の奉仕の心で地域興し及びロータリー公共イメージ向上に多大なる貢献をされましたので、ここに当地区における誇るべきロータリアンとして表彰いたします」

おめでとうございます。

松江南ロータリークラブ　古志勝俊

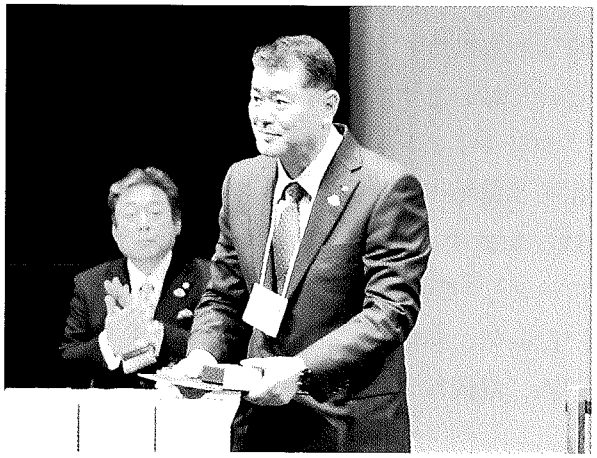
「貴殿は、ロータリーの奉仕の理念を実現すべく、超我の奉仕の心で地域及びロータリーの活性化に多大なる貢献をされましたので、ここに当地区における誇るべきロータリアンとして表彰いたします」

おめでとうございます。

松江東ロータリークラブ　安部正之
（代理：松江東ロータリークラブ副会長 永瀬公男）

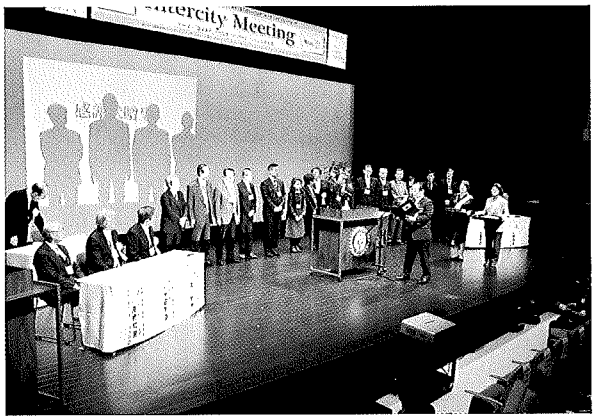
「貴殿は、ロータリーの奉仕の理念を実現すべく、超我の奉仕の心で地域における奉仕活動に励まれ、伝統行事保存や青少年奉仕に素晴らしい実績を残されましたので、ここに当地区における誇るべきロータリアンとして表彰いたします」

おめでとうございます。



浜田ロータリークラブ　江木修二

クラブ会長感謝状贈呈



これもわたしが勝手にやっていることでこの年度だけになると思いますが、私が地区ガバナーとなってから各クラブの会長さんに大変お世話になっていると思っております。それで各クラブの会長さんに感謝状を差し上げるということが今年の私のアイデアでございます。

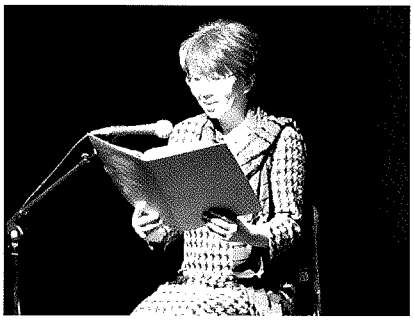
先ほども実は、まだ終わっていないのにもらいにくいと言われる方もいらっしゃいましたが、今お渡しするのは、もし全て上手くいっていればそれを続けていただければ結構ですし、まだやり足りないと思っていらっしゃる方はこれを契機にがんばっていただくために今日お持ちいたしております。

「貴殿は、クラブ会長として貴クラブのさらなる活性化に取り組まれ、「あいことばはＥｎｊｏｙ Ｒｏｔａｒｙ」に基づき、クラブ会員がロータリー活動に積極的に「参画」し、「相互理解」を促進し、奉仕活動を「実践」して、ロータリーの「良さ」を実感し、ロータリーを「好き」になることを目標にされて、国際ロータリー年度テーマ「世界へのプレゼントになろう」の達成に加え、「記憶に残るよい年度」の実現にご尽力されましたので、ここに感謝状を贈呈します」

お世話になります。よろしくお願いいたします。

基調講演

オープニング	奏　者	樋野達夫
	ナレーション	布野直美
講師紹介	ホストクラブ会長	池淵俊雄
講　演	NPO法人出雲学研究所　理事長	藤岡大拙 氏
	演題	「出雲文化について－その特質と有用性」
謝　辞	ホストクラブ会長	池淵俊雄



講師　藤岡大拙（ふじおかだいせつ）氏

【略　　歴】

昭和７年	（６月26日）島根県斐川町に生まれる
昭和31年	京都大学文学部史学科（国史学専攻）卒業
昭和33年	京都大学大学院文学研究科修士課程（日本中世宗教史）修了
昭和33年	島根県公立高等学校教諭
昭和47年	島根県立図書館資料課長
昭和63年	島根県立島根女子短期大学（現　島根県立大学短期大学部）教授
平成元年	島根県立八雲立つ風土記の丘所長（併任）
平成８年３月	同短期大学定年退職、風土記の丘所長は継続
平成８年４月	同短期大学名誉教授
平成９年８月	同短期大学学長
平成17年３月	同短期大学学長、および風土記の丘所長退任
平成17年４月	ＮＰＯ法人出雲学研究所理事長、荒神谷博物館館長
平成22年４月	島根県文化振興財団（現 公益財団法人しまね文化振興財団）理事長
平成22年８月	松江歴史館館長
平成22年11月	瑞宝中綬章　受章

【社会的活動】　島根県景観審議会委員長、松江市文化財保護審議会委員長など、多数の委員を務める。島根県立図書館において、「古文書を読む会」の講師を45年間、「出雲国風土記を読む会」の講師を35年間務める。出雲弁保存会会長を務める。

【著　　書】　「島根県地方史論攷」「山中鹿介紀行」「出雲人」「塩冶判官高貞」「出雲礼讃」「出雲とわず語り」「心の旅」「今、出雲がおもしろい」「出雲弁談義」「神々と歩く出雲神話」「出雲学への軌跡」など多数。

講　　演

演　題

「出雲文化について
―その特質と有用性」

ＮＰＯ法人出雲学研究所　理事長

藤　岡　大　拙　氏

皆さん、今日は。島根県の各市から出雲の方においでいただきまして大変ありがとうございます。私も出雲市の市民でございます。先ほどは樋野さんの妙なる弥生の土笛をお聞きいただいたと思います。出雲の四季、春、夏、秋、冬、そういうのを表現しておられました。特に風の音が印象的だったと思います。あれは斐川平野の特徴である築地松散居村、築地松に風が当たる所を象徴しておられるのではないかなというふうに思っております。いずれにしても、出雲の自然というのは穏やかで、静かで、四季の変化が非常に微妙でございます。

かつて昭和の18年頃ですが、益田出身の小説家に田畑修一郎という人がおられました。残念ながら、この昭和18年に盛岡というところで急性盲腸炎のために亡くなりました。しかし、彼は「鳥羽家の子供」という作品で第一回目の芥川賞候補作家になりました。最終選考まで残って、最後に中山義秀の「厚物咲」に負けて第二番目ということになりました。でも、この人が戦後まで生きておれば、確実に芥川賞作家になったと私は信じています。そのぐらいの力量のある作家が島根県から出ています。この人が「出雲・石見」という本を書いています。昭和18年に出ていますが、これは今でも新刊本が書店に並んでいるくらい、大変に寿命の長い作品です。私も実はこういう地域文化論のようなことをやってきましたけれども、とても彼の作品に及ぶことが出来ない、素晴らしい才能の持ち主だと思います。その人が「出雲・石見」という本の中の最初のところで、中海とか松江とか、あるいは宍道湖を見ながら書いているところがあります。それによりますと、「水と空と雲の微妙なるたゆたい」、これがあらゆる出雲的なものに反映しているというふうな、非常に分かりにくい、けれども何か、どこか分かりそうな、そんな感じの表現をしております。「水と空と雲の微妙なるたゆたい」でございます。要するにそういう三者が合わさった微妙な雰囲気、こういうようなものが、出雲の人間の気質やら人間のつくった文化やらそういうものに影響しておるというふうなことを言っております。具体的に言うと、お茶道のようなものを彼は考えていたようですがお茶道のみならず、あらゆる文化というものに今のような特徴があるということなんですよ。たとえば、信州の方へ行ったら、夏でも氷雪を抱くような、スノーキャップの山々がそこには見える。自ずと身が引き締まるような思いになる。あるいは、夏の瀬戸内海沿岸ですと、夕凪のあの温さ、たまらんような温さ、暑さ。あるいは、北海道の方へ行けば、しばれるような厳しい寒さ。そういうものが無いわけですよ。寒いと言っても程度もの。暑いと言っても程度もの。出雲というところは結局、平凡な、あるいは、特徴の無い、そういう自然であります。そのことが文化面に反映をしているわけです。ですから、出雲の歴史というものを紐解きますと、例えば教科書に載るような人物とか、事件というものは全くありません。石見の方へ行けば、鴎外が出てきたり、亀井茲監が出てきたり、あるいは西周が出てくる。これらは高校の教科書でほとんど出て参りますね。

そんなのが無いんです。若槻禮次郎すら出てこない教科書の方が多いんです。ですから、例えば何とかの戦い、何とかの戦争、そういうものが歴史上ありますが、そんなものは出てきません。出雲の戦いなんか出てきません。尼子氏だって出てこないんです。月山富田城の尼子氏は全盛時代には中国地方11ヶ国を制覇したと言われておるのに、大内義隆や毛利元就は出ても、尼子経久は出てこない。山中鹿介も出てこないわけであります。つまり、目立った大哲学者、大芸術家、大武将、大学者、それらが全然出てこない。ですから歴史そのものが自然と同じように、誠に平凡な歴史であるということでございます。ただ、教科書に出てこないからつまらない歴史だということでは決してございません。そういう意味ではありませんが、教科書に載るような歴史的事情とか人物とかいうものが現れていない。それはまさに、「水と空と雲の微妙なるたゆたい」そういう出雲的な自然の反映みたいに思われてならないんです。

実は、今日の21世紀まで出雲の歴史というのはそういう形で伝わってきたんです。けれども、もう少し前、ＢＣの一世紀からＡＤの一、二世紀頃、それは弥生時代であります。この時代、出雲地方はすごく発展した所でした。例えばその事は何が物語るのかと言いますと、まず1984年、昭和59年に発見された荒神谷の青銅器群であります。380個の青銅器。内訳を言いますと、358本の銅剣。16本の銅矛。６個の銅鐸。合わせて380個。今は全て一括、国宝になっておりますけれども、そういうものが出ております。全国で、あそこで１本、ここで２本というものを合わせても300本にもならないのに、１ヶ所からそれを遥かに上回ったものが出てきた。平成８年になりますと、荒神谷から東南の方向、たった3. 3キロ離れた雲南市加茂町の岩倉というところから銅鐸39個が発見されます。これはもう断トツで日本一でございます。それまでは滋賀県の野洲市と言う所の24個が日本一でありましたのが、一気にそれを凌いで岩倉が日本一になりました。その他に今、松江市に市立病院が建っていますね。小高い丘の上に。ホテルのような美しい病院がありますが、元々あれはもう少し西隣の所にあった田和山という山につくるはずでありました。ですがそこを考古学的な調査をいたしましたら、非常に大事なものが発見された為にやむ無くそれを止めて、隣の田んぼに、ちょうどあの辺に高速道路の工事中の土がたくさんありましたので、それで埋め立てて、造成して、今の物が建ったわけです。それで隣の田和山と言う所には、今は公園が出来ております。この田和山遺跡と言うのが弥生時代の砦の跡と言いますか、お城の跡のようなものでございます。頂上には９本柱が発見されましたし、その他につぶて石がたくさん出てきました。頂上にいて、下から攻め上がってくるのに対して、石をぶつけて防ぐ、そういう石がたくさん出てきました。これは珍しいです。弥生時代の城というものは、ほとんど他所にはありません。魏志倭人伝の中に倭国大乱という話がありますけれど、正に倭の国が大きく乱れて戦争している、それを物語るかのような砦の跡が出てきた。更にはその東、米子市と大山町にまたがった所に、妻木晩田遺跡というのがございます。元々は京阪電鉄が買収してそこに一大リゾート地を造ろうといたしまして、考古学調査をやったら、出るわ、出るわで、出てきたのが弥生時代の住居跡であります。もう一つは、出雲市の大津の弥生の森にあります四隅突出型墳丘墓という、非常に奇妙、奇天烈な、ちっちゃい、小型のものがたくさん出ました。そういうことで、完全に佐賀県の吉野ヶ里遺跡をオーバーするような、大きな古代の集落遺跡が発見されました。67ヘクタール程が国指定の史跡になっておりますが、これはもちろん佐賀県の跡数規模を上回るものであります。更に鳥取県の今は鳥取市になりましたけれど、そこに青谷上寺地遺跡というのがあります。田んぼの中に道をつける道路工事の時に、出るわ、出るわで、出てきたのは人骨。それに、腰の方に矢じりが刺さったような、つまり倭国大乱を物語るような、戦死した者の骨のようなものがたくさん出てきま

した。スコップですくい上げるほどたくさん出てきました。それのみならず、弥生時代の土器だとか、農機具だとか、あらゆるものが出てきました。弥生の博物館と言うあだ名が出来たほどであります。さっき言ったものは1984年に荒神谷で発見されてから以後に出てきた新しい遺跡です。それらは誠にメジャーな、発見されたら直ぐにでも国の史跡にされるような、そういうメジャーなものなんですよ。そういうのが山陰道であっという間に出てきた。これによって、紀元一世紀を中心にしたその前後の時期、弥生の中期と言いますが、この頃は誰がどう言ったって、だれが反対したって、反対しようが無いほど、山陰と言う所が列島の中で最も先進地域であったと言うこと。これはもう否定することは出来ません。その中で、ドットを落としてこの辺で一番弥生の中期の遺跡が多いか調べますと、それは集中的に出雲地方にドットが落ちるんであります。従って、この列島で最も先進地域な山陰の中でも中心地域というのが出雲であると言うことも否定できないんです。山陰は、今でも新幹線も何も通っておりませんし、外国へ行こうとすればわざわざ広島か岡山か、もっと遠距離に行くためには関空までいかなければいけません。ようやく米子から香港へ飛行機が飛ぶような話しも聞いております。今の日本では一番僻遠のような所にいるんです。しかし、今から2000年前は、確実にこの列島の一番先進地域であった。なぜここが先進地域に成り得たかということは、もちろん朝鮮半島との交流でありますけど、これは今日の時間の関係もありますので差し置きまして、とにかく栄えておったことを認識していただきたいと思います。

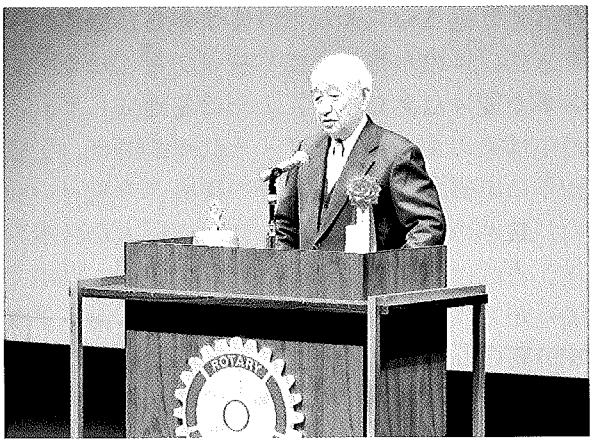
しかし、栄華はいつまでも続くわけでは無くて、やがて大和朝廷が急速に伸びてきて、これにやっつけられてしまう時期が来ます。大和朝廷にやられる前に実は岡山や広島地方、つまり吉備という国によってまず一発やられる、というふうに言われております。なんでそんなことが言えるかと言ったら、弥生の森の西谷墳墓群の中から吉備地方の土器だとか、吉備地方の特徴があるものが出てくるからです。だから、吉備の勢力が入ってきたと言うことを物語っています。したがって、これは吉備にやられたからだろうということになるわけです。吉備にここは占領されてしまうんでしょう。しかし、やがて吉備が大和朝廷と戦争を始めます。何が原因だったかと言ったら、瀬戸内海の制海権を巡る戦争です。結果、吉備が敗れました。大和朝廷が吉備の方へ入り込んで来ました。その大和朝廷の勢力が、吉備の軍隊も引き連れて、そして中国山脈を乗り越えて、我が出雲へ入って来たんです。二度目ですね。これはなかなか太刀打ち出来ませんでした。当時の出雲国王は、松江の南郊、大庭の里を本拠にしておった出雲氏、出雲国造と言われる勢力であります。その勢力も、とてもこれは勝ち目が無いと思って、迫ってきた大和朝廷、プラス吉備の軍隊の軍門に降るんです。ほとんど戦うことをしないで平和のうちに降参したと言うことになります。出雲は二回の敗北によって、かつてのすごい繁栄というものが跡形も無く消え去って服属国になってしまったということであります。敗れた出雲がどうなったかと言いますと徹底的な、排他的な、鎖国体制に入ります。自分たちだけで生きていこうとするんです。だから中央から流れてくるような文化は極力跳ね返し、極力入れないようにして、自分たちが築いてきた、かつてのあの繁栄時代の文化というものを頑なに守り続けてこようとした。もちろん、それが許されるものではありませんから、強制的に入ってくるものについては否定は出来ません、拒否はできませんが、出来る限り自分のものを守り続けようとした。ここに出雲というのが、現在に至るまでものすごく保守的で、内向きな性向という、キャラクターを持っているということの原因でございます。何が、2000年も前のものを今頃まで影響せしめるかというふうにお考えの方もいらっしゃるでしょう。今のようなＩＴの時代のような目くるめき世界ですと、私の若い時と今とは雲泥の差で、わずか70～80年間で人の心の中までが変わってしまいました。しかし、それ以前

の時代はそういう変化が非常に緩やかでございまして、そのために革命的な、レボリューショナルな変革はありません。そのために、ずっと続いている。モラルにしても、そう大きな変化をしないで続けて来た。そういうものを出雲は持ち続けて来た。出雲人の心の中、ＤＮＡの中には古代の繁栄時代のものをずっと伝えている部分があると言うふうに思います。

平和のうちに負けたことを物語るのが古事記の国譲りの神話ですが、これは少し置いておいて、日本書紀ではどう書かれているか。日本書紀には国譲りの事件の本文とは別にいろいろな説が載っているんです。「一書に曰く」として、５つも６つも載っています。それでこの日本書紀の国譲りの神話の、一書の第二を見ますと、次のように出てきます。天上界から下界の、出雲の世界を自分たちの支配下に入れようとして使いが派遣されます。その使いの正使、大将は経津主神（ふつぬしのかみ）です。経津と言うのはチャンバラをテレビで観ますと、刀を振る時にビュッというような音を入れますね。あの音のことを経津と言うんです。だから、経津主神と言うのは剣の神様という意味です。副使と言ってこの神様をアシストするものが後に付いて行きます。これには武甕槌神（たけみかづちのかみ）が付いて行きます。古事記ではこの武甕槌神が正使と書いてありますけれど、一書の第二では副使であります。武甕というのは猛々しい雷の神、恐ろしい雷さんの神という意味です。だから、剣の神と雷の神とが降りてきたというんですから恐ろしいわけです。そして「いましがうしはけるこのあしはらのなかつくにおば　あまつかみにゆずるやいなや」というふうに、稲佐の浜でもって強圧的に談判をするんです。これが古事記だと、大国さんがへなへなになられまして、「私の一存では返事が出来ません。息子にも聞いてください」と言って、事代（ことしろ）さんや、建御名方（たけみなかた）さんに聞くことになるんですが、この一書の第二では全然違います。「うたがう　いましふたはしらのかみはもとこれあがもとにきませるにあらざるか　ゆるさじ」と言って、びっくりするような強硬な返事をするんです。出雲弁で言いますと、「なにぃ わしがおーとこにお前ら後から来ただないか 大きな面するな 許さん」まあ、こういうふうな意味ですよ。石見のお方はお分かりになりましたでしょうか。とにかく「あがもとにきませるにあらざるか」俺がここにおる所に後から来たじゃないか。そんな者が大きな面して「国を譲るや否や」なんて言えるか。許さん。これには使いのものがびっくりしたんですね。帰って行くんですよ。「怒られましたわ」と言って。そうしたら上で命令し、派遣をした神様、神皇産霊神（かみむすびのかみ）とか、高御産巣日神（たかみむすびのかみ）という方がいらっしゃって、「ほお、そうか、怒りやがったか。それなら言い方を変えてもう一回行ってこい」こう言って再び降されました。そしてそこで「あんたが言うことは正しい。私の方が悪かった。もう一度改めて説明し直そう。しかし、まず第一に、この出雲の土地を天津神が支配すると言う根本的なところは変えないよ。あくまでここ、出雲は天津神が支配するよ。しかし、その代わり大国主命よ、あんたは隠れたることをやりなさい。つまり、黄泉の国の支配者になってください」とはっきり言っています。その他に、「この階段を降りて遊ぶ時には桟橋を掛けてあげよう。天鳥船（あめのとりふね）の様な、レジャーボートみたいなものも作ってあげるよ」というような、散々良いこと、ご愛想を言うんです。そうしたら大国さんはすっかりいい気になって、「そこまで言われるならば私はこの国をあんたに譲りましょう」こういうようなことを言って、円満に国譲りが行われた。ただ、へなへなと最初からなるんじゃなくて、一発かましといてから向こうに条件を引き出させといて、それから、それならば、ということで国譲りを承諾する。こういうくだりがあるんです。

ここで大事なことは、「この現実の世界は高天原が支配するけれども、代わりにあんたは死の世界、黄泉の世界を支配しなさい」こういうようなことを言ったということが日本書紀とい

う公文書の中に書かれているということです。これが出雲にとっては、敗れた出雲にとってはその後、つまりトランプで言えばジョーカーになるんでしょうか、あるいは印籠と言ってもいいかもしれません。「何んだいかんだい言われたらこれを出すぞ」。なぜか。つまり、黄泉の国の支配権をもっているということは宗教的王国を形成することができますわね。そして、高天原も神様かもしれませんが、神様の時代からやがて神皇と言いまして、人間が天皇になって大将になる時が来ます。それは神武天皇からです。神武、綏靖、安寧、懿徳、孝昭、孝安、孝霊とずっと続いて、天皇が人間になる。人間になったらなんぼ天皇でも死なないけん。死んだらどこへ行くかと言ったら黄泉の国に行くんでしょうか。そこには出雲の大神様、大国主神が厳然として、支配者として存在する。ならば、黄泉の国においては天皇は、大国主の下にひざまずかなければならない。こういう論になっていくんです。それを出雲は持っている、キャスティングボードを持っているということです。これを多くの出雲の人々は知りません。もちろん我々も知りませんが、昔の支配者はちゃんと隠してジョーカーを持っていて、ここ一番の時にバッと出す、こういうことです。例えば、古事記の中では国譲りの時、最初に事代主に、「おやじに談判したら子供に聞けということだが、お前はどう思うか」と言ったら、「お父さん、反対したってとても勝ち目が無いから、国譲りましょうや」と言うので本当に穏やかに国を譲ります。次男の建御名方は「何おう、力比べで勝負しようじゃないか、俺が負けたら国譲りは賛成するが、俺が勝ったら国譲りは反対だ」こういうことでしたね。結局、力比べしたけれども上から降りて来ていた使いの武甕槌神に取って投げられてしまって、彼は逃げて行く。「おのれ逃がすものか」というので後を追っかけていったら諏訪湖のほとりまで行って降参します。「私はもうここから動きません。どうか出雲の国の国譲りは勝手にやってください。私はもう何にも言いません」と降参する。ですから諏訪



大社のご祭神が建御名方という大国さんの息子さんがなっている。一見不思議ですね。あんなに離れた信州のところに出雲の神様がおるなんて不思議ですが、そういった物語から来ているわけです。こういうふうにだいたい弱々しいんです。古事記の書き方というのは。そういう感じがしますでしょ。それに対して日本書紀は、かなり大国主命の主体性というようなものが描かれているということが言えると思います。

この一書の第二によって、我が出雲の国は宗教王国とみなされるわけです。ですから、大和朝廷から言ったら、なんか薄気味悪いな。力はあんまり強く無さそうだし、大分遠方におるけれども、何か祟ったり、何か恐ろしいぞというような、そういう薄気味悪さみないたものを出雲に対して常に持たせるということになりました。平安時代の半ば頃に、実は出雲の大社というのは最大の大きさ、高さが16丈。今の高さは８丈ですよ。それで日本一の大きさですけれども。平安時代には倍の16丈。１丈は３メートルですから、48メートルという巨大な高さだった。しかも、階段が１町の長さですから約110メートル。それはもう想像を絶するようなものです。ですから、建ってから何年か経つと、自然の重みと、多少腐ってきますから力が弱くなって倒れるんですよ。連続５回。第６回目もまた同じのを建てた。それで６回目も倒れるはずだったけれども、倒れる前に火事で焼けたんです。そうすると掘っ立て柱ですから、土の中に柱をブスッと突っ込みますね。これが普通に自然に

ひっくり返ったら跳ね上げますから、撤去するときには柱の一番下までも持って行くんですが、火事で焼けたとなれば、上だけを撤去して、土の中はそのまま残します。それが2000年、平成12年に出雲大社の境内、今の拝殿と本殿との間の、右手の所から発見されたあの巨大な３本の柱、それは火災の為に残ったんですよ。火事で焼けた為に、お陰さまで。火事は大体悔やまれなければなりませんが、この場合は火事だから残ったと言うことになります。そして巨大な柱であることが分かった。一つの直径が1.5メートルあります。それを３本合わせてカネの帯でバインドして１本にしたものが１本として計算される。それが９本建っていたんですよ。だから本当に雲突くような大きなものであったわけです。何でそんなひっくり返るようなものを建てたのか。第一、何で大きなものを建てたのか。ぎりぎりまで大きなものを建てたら当然ひっくり返ります。ひっくり返ることを反省して小さいものにすればいいものを、倒れても、倒れても、５回も６回も同じものを建てる。なぜそんなことをしたか。これを今はっきり説明する学者はおりません。ですから、私のめちゃくちゃ論理ではありますけど、私の理屈付けはどうかと言いますと、それは、大和朝廷側、あるいは天皇側が、出雲の大神様、具体的に言えば大国主神かもしれませんが、一応、出雲の大神様、それの祟り、霊威力と言うもの、それを恐れた為ですよ。国譲りの時に、「国は譲ります、ただし一つだけお願いがある、天上界の大神様のご子孫が住んでおるあの壮大な宮殿と同じような大きさのものを私の住処として建ててください」大国主がそんなものを要求したんですよ。そうしたら向こう側が、「いいじゃないか、建ててやろうじゃないか」こう言って、古事記では「天之御舎（あめのみあらか）」、日本書紀では「天日隅宮（あめのひすみのみや）」、出雲国風土記では「天日栖宮（あめのひすみのみや）」、言い方は違いますけど同じもの、その巨大なものを建ててあげると高天原がちゃんと約束してくれたんです。しかし実際にはそんな大きなものを建ててくれなかった。建ててくれと約束したのになぜ建てないのか。と言うので繰り返し、繰り返し要求する。それに対して、奈良時代のような天皇権力が非常に強い時代は、「何を言うとるか」というので出雲の要求を蹴って来た。それだけの力が律令政府にはありましたから。しかし、平安時代に入ったら律令政府はガタガタになります。地方で反乱が起きます。言うことを聞かないのがたくさん出てきます。あるいは、土地国有制が崩れていきます。班田収授みたいなものが無くなっていきます。そして荘園のようなものが出てきて、私有地がいっぱい出てきて、大富豪、大土地所有者の貴族だとか、社寺、そういうようなものが出てきてわがままをする。あるいは海の向こうから新羅が虎視眈々と山陰を狙っているというようなこと。そして都の中は大変な退廃で、袴垂保輔のように昼間はまじめな役人だけれども、夜になると強盗を働くと言うような、ジキル博士とハイド氏みたいなものがたくさん出てくる。芥川の羅生門に出てくるように羅生門の上で、おばあさんが死んだ我が子の毛を引き抜くという、もうそれは奇々怪界な模様が現出されます。そこへ持ってきて御釈迦さんが死んでから2000年目の末法の思想が間もなく近づいてきた。こういう1019年、ちょうど藤原道長が出てくるちょっと前ですが、突如として刀伊という女真族が襲ってきます。対馬を襲い、壱岐を襲い、そして北九州へ上陸いたします。彼らは占領した所の人民をことごとく殺す。そして、女と若い者とは全部奴隷として連れて帰る。殺した死体を見たら全部、耳たぶと鼻が削がれておる。今までの戦争文化の中で日本人が経験したこと無いような、残虐な、そういう形のことをしでかすようなまさに乱暴な、暴虐な、そういう異民族が攻め込んで来た。幸いにして大宰権帥の藤原隆家というのが獅子奮迅してこれを撃退してくれましたけれども、今までのような色々な要素の上に、更なる要素として、天皇以下、摂政関白に衝撃を与えるんですね。そんな国が危ない時に、もしも出雲の大神様が、約束通りもっと大きな

ものを建てろと霊威力を発揮してくれたら、これはもうやれん。だったらせめて国譲りの要求だけは入れてあげなければいけない。そこで段々、段々大きくした。もうこれ以上大きく出来ませんという時に、倒れたからと言って、大きくしすぎたからもう少し小さくしたらいいとすべきなのに、それが出来ないのは、今そんなことをしたら再び祟りが来る。霊威力が及んでくる。だから転ぶことが分かっていても、それは大きいのを建てざるを得ない。こういう事ではなかったかと私は想像しております。ただ、私のこの考え方は、さる有名な先生によって、にべも無く否定されました。上田正昭さんであります。「君、そんなアホな事言うな」というふうに言われました。それなら「あなたはどう思いますか」と、その時に聞けばよかったけれども、聞くだけの余裕がありませんでした。まあしっぽを巻いて逃げたというのが本当のところであります。それ以後、誰もが明快な答えを出す者がおりませんから、私は今のようなことで大きくなったんだろうと思います。

それぐらい出雲と言うのは宗教性があるんです。ただし祟りとか霊威というのは一般人民に対しては決して発揮されるものではありません。それは偉大な、優しい、慈しみの、神様の愛として受け止めているわけですが、攻撃の目標というのはあくまでも朝廷であります。だから焼けましたね。焼けてから暫時、建たなかったんです。遷宮が無かったんです。そしていよいよ本遷宮が行なわれたのは、実は南北朝時代に入ってからですから、ほぼ150年くらい経ってからようやく遷宮がされました。その時は高さが一気に48メートルから20メートルぐらいまで落とされました。このぐらい落としたら、また出雲の大神様は何か言わないだろうか。こういう心配がありそうに思いますが、これは心配無用です。つまり、もう既に武家の世界であります。武家の世界の武家は出雲の大神に対して何ら責任は無いわけです。恐れることも無いんです。倒れるくらいだったら小さくする。それが当然だ。ということで、武家の政権ですと、恐れることなくそれがやれる。朝廷、天皇が権力を持っているときは、これはいかんと言うことだと思います。

次にもう一つだけ私が言いたいこと、指摘したいことがございます。それはつまり、宗教王国となったということによって二つの大きな特徴が出雲には出てきました。それは何かと言うと、一つは神話がたくさんあると言うこと。それはヨーロッパ人が日本人に対して、「我々ヨーロッパにはギリシャ神話、ローマ神話、ケルト神話、たくさんありますが、日本には神話はありますか」なんて聞いてきたら、日本人は憤然として「ありますよ、馬鹿にしないでくれ」と言いたげな顔をするでしょう。なぜかというと、神話があるということはその国の民族の歴史が古いということです。新しい、国、国民、こういう所には神話はありません。アメリカがその良い例であります。アメリカには神話はありません。だけども、イギリスとかフランスとかドイツとかイタリアとかそういう所には立派な神話があります。もちろんギリシャにはありますね。トルコにもあります。同時に中国にもあれば、ベトナムにもあるし、もちろん日本にもあります。だって日本は縄文時代からカウントしたら2万年くらいの歴史だと言いますが、最近、古志の成瀬さんが発見されました多伎町の砂原遺跡。あれなんか９万年ぐらいの鑑定が出ているくらいだから、９万年くらい前に多伎の方に人間が住んでいたということになりますね。そうすると、それは大変に古いことになります。もう神話があるのは当たり前。だから憤然として、「それはあります」と答える。そうするとヨーロッパ人が、「そうですか、それならば代表的な神話をひとつふたつ挙げてみてもらえませんか」とくるでしょう。そうすると日本人は、そうですねと言って挙げるのが、「まずは国引きの神話があります、それから黄泉の国の神話、八岐大蛇退治、因幡の素兎、国譲りなんていうのがありますね」とひとつふたつ挙げてくれというのに５つぐらい挙げるでしょう。今挙げた神話はことごとく出雲神話ではあ

りませんか。出雲神話と言うのは大国主やら素戔嗚尊（すさのおのみこと）という国津神の神様がヒーロー、ヒロインであると言うこと。舞台が出雲であると言うこと。それを満たしていれば出雲神話といえるでしょう。古事記には神話がたくさん載っていますが、実に３分の１強が出雲神話です。その他にまだ日本書紀にも古事記と重複しない神話があります。それから出雲国風土記にも短いですけれどもたくさんの出雲神話が載っております。それらを合わせれば本当に他所の地方とは比べ物にならない程の大量の出雲神話というものが存在しておるということです。これがまず一番の特徴ですが、もうひとつの特徴は、神話が多いからかもしれませんが、神社の数が多いということです。今、「神国島根」というごっつい本が島根県の神社庁から出ております。それを見ると神社の数は島根県全部でたくさんあって、800か、もっと有るかもしれません。ただ、私が言う神社が多いというのは、出雲国風土記に載っている神社の数です。覚えやすい数です。399であります。400に１足りない。399の神社がございます。これが他所の国と比べて多いか少ないかと言うことはできません。他所に風土記が無いから。無くなってしまっているから。だから比べられないんです。200年ほど後になって延喜式（えんぎしき）と言う本が出来ます。927年です。出雲国風土記は733年ですから、ざっと200年ほど後になります。その中に神名帳（じんみょうちょう）というのがあり、全国の神社のリストが載っています。そのリストを見ますと我が出雲の国は187社載っています。これは、先ほど399と言いましたが、200年経った後には187とはおかしなことだなとお思いでしょうが、主だった神社だけを載せておるんです。187だけピックアップして載せて、残り212社は延喜式には載せなかったんです。これはなんで載せなかったのか。ちゃんと訳があり、上の方だけを挙げた。それが187。これを他所の国と比べると、さすがに奈良が一番多くて286です。その次に多いのが三重県の伊勢の国であって253です。三番目が187の出雲の国です。出雲の国は三番目です。何だ三番目か、とお思いでしょうけれども、それは今言ったように上の方の大きなものばかりを比べたらそうであって、下には我が出雲の国では212社が登録されていないわけです。この部分を他所の国の部分と比べ合わせて見る事はできませんけれども、色んなことで比べてみることができます。それをやったのが加藤義成と言う雲南市加茂町出身の学者です。もちろん今はいらっしゃいません。亡くなってしまわれましたが、この人の研究によると、どうやら399というこの数字は日本で一番多かったんじゃないかと結論付けておられます。一応そういうことに、一番多かったと言うことにしましょう。さあ、その一番多い神社399。その時代に出雲だけで郡が９つありました。出雲９郡。意宇郡、島根郡、秋鹿郡、楯縫郡、出雲郡、神門郡、飯石郡、仁多郡、大原郡。これで９つであります。今もある郡もあるし、聞いたこと無いような郡もありましたね。その郡の中の意宇郡という郡は、今の松江の南、宍道町の佐々布荻田という所がありますがその辺りから始まって安来市の島田までの間、つまり宍道湖や中海よりも南側を含んだ所の大きい郡です。平安時代の初めにその東部が独立して能義郡が出来ました。その結果全部で10郡になって、これがずっと今日まで出雲10郡ということで来ましたけど、元は９郡だった。その中で、一番神社が多かったのは出雲郡であります。出雲郡と言うのはこの土地ですが、今いるここビッグハートの土地ではありませんで、もう少し北の山の麓の方、出雲市の中でも鳶巣、高浜、遥堪、大社、日御碕、宇龍、猪目、鰐淵村、西田村、国富村、そしてそれに斐川町全部を合わせたもの、これが出雲郡であります。その出雲郡の神社の数が実に122社あります。399の内に122社あるということは全体の30.6％がこの出雲郡の中に集中しておるということです。特にここから見る北山と言いまして、弥山だとか、花高山だとかいう400メートル以上の山々が出雲の市街地の真北にあります。その麓の方に集中的に存在いたします。

そこに遥堪という地名があります。この名前は平安時代の終わり頃から出てくる名前であって風土記の時代にはまだ無いんであります。風土記の時代にはこの辺は杵築の郷と呼んでおりますが、そこになんと、阿須伎神社という同じ名前の神社が40社もあります。それは密集しているんです。どうしてそんなことがあるだろうか。実に不思議です。その40社ある阿須伎神社の西隣の所に杵築の大社、つまり大社が存在します。不思議な所だなと思います。いかにも宗教王国らしい存在でございます。それで意宇郡というのは今言ったようにものすごく大きい所で、宍道から安来まで、南の方は広瀬町の布部だとか、あるいは伯太町も入ります。そういう大きいところですのに、神社の数は16.8%でございますから、出雲郡よりもずっと少ないんです。第2位ではありますけどね。ここの出雲市には神門郡と言うところがございます。実はこの辺は神門郡であります。神門郡は全体の9.3%ぐらいしか神社の数が無いということです。だから36、7ぐらいしか無い。出雲郡が122あるのに、ズトンと数が落ちてしまいます。出雲郡というところは実に不思議な所だということであります。

こういう風にして神話が多い、神社が多い、この二つの特徴がその後の出雲文化に大きな影響を与えることになります。まず、因幡の素兎というのをご存知でしょうか。素兎を助けて、そのお陰で大国主命は八上比売（やがみひめ）というお嬢様をうまいことせしめてルンルン気分で帰ってこられますが、最初に行ったお兄さんたちは全部、肘鉄砲を食らわされて追い返されるんです。それでもう気分が悪いと言うことで、弟の大国を途中で待ち構えてリンチを加えるんです。そのリンチを加える場所は米子の南に、今は南部町と言っていますが、昔は会見町でした。そこの手間山と言う山の麓で待っていた。そして、「おい大国、俺たちはこれからこの手間山で猪狩りをやる、獲物を転げ落とすからお前は下にいて受け止めろ、ただしこの猪は真っ赤な猪だ」と言います。わかりましたと言って下で待っていたら、案の定、コロコロ、コロコロ、真っ赤な猪が下りてきたんですね。それをパチッと受け止めたんですよ。そうしたら、ジュッて火傷して、ちぎれて岩にくっ付いた。つまり猪ではなくて、真っ赤に焼いた石が落ちてきたんですよ。それで騙されて焼け死んだんですよ。それを見たお母様の刺国若比売命（さしくにわかひめのみこと）が、ぱーっと天上界へ上がって行かれた。「助けてください」そこに高皇産霊尊（たかみむすびのみこと）がいらっしゃった。「助けてください」と言うと、それを見ておられたんですよ。「かわいそうなことをしたな、助けてあげなさい」と言って、傍らにおった蚶貝比売（きさかいひめ）と、蛤貝比売（うむかいひめ）と言う二人の貝の神様。貝の神様というのは女の神様と言うことであり、同時に、ドクターであった。私はこれは女性のドクターだと思っておりますけれど、島根大学の学長先生であった小林祥泰先生は、いや、これはナースだと言われますわ。私は女医さんだと思っておりますが、ここのところは素人と、向こうはお医者様の専門家が見てのところですから、そっちの方が正しいかもしれませんが、私はどっちでもいいんです。こだわりません。蚶貝比売というのは赤貝の神様なんです。きさげるを出雲弁ではこさげると言います。真っ黒けになって、黒こげになってくっ付いてしまったのをガッガッガッガときさげた。下にかすが落ちます。黒いかすが。それを今度は蛤貝比売、これは蛤（はまぐり）の神様なんですが、その蛤の汁を黒い所に掛けた。そうしたら見る見るうちに、中からイケメンの大国主命が再生して出てくる。少年みたいな時に殺されたんですけれど、生まれて、再生した時には24、5の若武者になって出てきた。ここが単なる再生と違う所ですよ。立派になって生まれ変わるんですよ。お母様の刺国若比売命は小躍りして喜びましたが、喜ばないのは兄さんたちです。「ちきしょう、生き返りやがったか、もう一発やってやろう」今度は木を切って真ん中を割りまして、楔を入れてV字系の穴を空け、「中を通って向こうへ行け、言うこと聞かないと殺

すぞ」と言いました。「はい、はい」と言って中へ入ったところを見ていてバーンと楔を外しますから、せんべいになります。せんべいになって、また死んだんです。その時はお母様の刺国若比売命がどこにいるか必死になって探して、そして挟まれて死んでいるのを見つけ、自分で引っ張り出して看病なさいます。そして、とうとう生き返らせるんです。そして「大国さんや、もうこのままじゃ兄貴に殺されるぞ、だから二人で逃げよう、紀の国に大屋毘古命（おおやひこのみこと）がいらっしゃるからあれを頼って行こう」と言って、紀の国、すなわち和歌山県紀伊の国へ逃げて行く。そこからまた色々な物語が展開いたしますけれど、この時に見せる母親の献身的な子供に対する所の愛情というものは今日、忘れ去られてしまったんじゃないかと思うほどであります。

昔、私は小学校の時に母の力というものを国語の本で習いました。まあ皆さんの中にはそのご記憶にある方はまず皆無に近いほど無いでしょうけれども。つまり戦前の国定教科書でございます。巻10だったと思いますから、５年生の後半で習います。井上聞多は今日もまた藩で仕事があって遅くなって自分の自宅、湯田の温泉のある自分の家に帰っていく。爺やの提灯を頼りにして二人で帰っていく。芋畑の中で突如として暴漢に襲われる。バサッと後ろから袈裟に切られた。瀕死の重症。爺やは飛んで帰って兄さんに迎えに来るように知らせる。そして、とりあえず近所の家から戸板を借りて、乗せて帰ります。急を知らせて床にはたくさんの友達たちが集まっていた。その中で兄さんが言います。「もう弟には血の一滴もありません、せめて兄貴の刀でとどめを刺して安楽にさしてやりとうございます」すると母親が、「待ってください、私の前でそんなことしてはなりません、だって、もうこれ以上苦しめることが却っていかんのじゃないですか、もしも殺すならこの私、母親もろともに切ってくれ」血みどろの子供をしっかりと抱いて「さあ切ってくれ」と。これは切れませんわね。兄貴は切るのを止めます。そこに長崎帰りの洋学を学んだ医者の卵の方がいて、あり合わせの焼酎で傷口を洗い、畳針で縫った。それから以後何十日。不眠不休の看病。ついに生き返る。後の井上馨外務大臣である。こうオチが付くんですよ。だけど偉いもんでなくたっていいんですよ。僕はむしろ偉いもんだからあまりよくないと思うけど。誰でも人間、つまりはお母さんの力って言うのはこれだけ偉大だと言う事です。トロッコと言う芥川の小説があります。向こうへ行ったら、もう俺たちはここで終わりだから、お前一人帰れと言われる。子供がトロッコの線路沿いに、真っ黒けのところを伊東から伊豆半島の先端の方に向かって鉄道を作る時でしょう。泣きながら帰って来ます。近所の者が探しに出ている。大騒ぎしている。そういう所に帰って来て、真っ先に、醤油か油の匂いのエプロンのお母さんの胸元に取りすがって泣くっていう様、あれが親子の本当の姿、お母様であり子供であるはずですが、今それが失われていると思いませんか。なぜそんなになってしまったのか。子が親を殺す、親が子を殺すと言う様な、こんな地獄道が現在展開されているという時に、今こそこういう古代の神話の中の真実というものを蘇らせて現代に応用すべきではないかと思うんです。言うことは簡単だがやることは難しいことは分かっていますが、私はそう思います。

次に、三沢の郷という所があります。三沢の郷と言うのは今で言う奥出雲町であります。そこに三沢城という城山がございます。大国主命の子供の阿遲須枳高日子命（あじすきたかひこのみこと）が生まれた。しかし、生まれた時からものを言わない。何故言わないのだろうか、しかも泣いてばかり。一生懸命で船に乗せて八十島を経巡ってあやしたりした。また、海の中に高い家を建て、階段を作り、海で遊び、また上にあがって寝泊りする、そういうことをやった。この場所が塩冶に高西と言う地名で残っております。まあそういうようなことをしながら大国主命が一生懸命で子供を育てられた。しかし、ものを言わない。そこで「どうしても

のを言わないのですか」と神に祈った。そうしたら「間もなくものを言うようになるだろう」と言うお告げがあった。ある時、お前はものを言えるかと聞いたら、「三沢」それだけ言った。「三沢って何だ」と言ったら、サッサッサッサとお父さんの前を通って向こうへ行くので後から付いていったら三沢の鴨倉山という所の麓にある池の所まで行って「ここだ」と言う。そこでここが三沢という地名になったという話なんです。つまりお父様の大国主命は子供の為に一生懸命で子育てをなさったということが出てくるのであります。

これは風土記に出てきますけれど、雲南市に大東町という町があります。この大東町の中に阿用（あよ）という所があります。今は、「あよう」と引っ張るようになってしまいましたが、元々風土記では「あよ」ここで切ります。なんであよかと言ったら、ここに農民の親子がおった。田を耕しておった。突如として目一つの鬼が襲ってきた。パクッと若者を食った。お父さんとお母さんはびっくりして、その付近の竹やぶの中に隠れた。ただ、あまりにも恐ろしくて、ブルブル震えておったので、竹を伝ってその震えが枝に伝わって震えとる。だから、鬼が見たら分かる。そしたら自分を食べた後、次は親を食べるだろう。そこでくわえられながらも、この子供は「お父さん、お母さん、動くよ、動くよ」と言って注意をする。動くという言葉を古代の言葉では「あよく」と言った。だから、「動動（あよあよ）」と叫んだ。だからこの土地をあよと言うのです。という地名伝承になりますけど、地名伝承はどうでもよくて、つまり、くわえられながらも、親の安否を気遣うという子供の孝行心、こう言うものが古代の神話の中に出てきておると言うことであります。

国譲りの神話で和譲の精神というものが説かれたということはよく言われることですが、今こそこの和譲という言葉は一番大事なことで、自己主張だけをものとし、テレビなんかでも一晩中、いわゆるディベートというのをやると言うのが流行りであります。ただ、我々出雲人なんかはディベートは嫌いです。けんか腰で物を言って穏やかな心でおれるはずが無い。例え言い負かしたとしても、それで自分が気持ちがいいはずがないと思います。平和な内に譲るべきものは譲る。譲れないものは譲らんでもいい。でも、何も怒り狂ったような格好をする必要は全く無い。こういうのが恐らく平和のうちに国を譲った和譲の心だろうと思っております。

もうひとつ、古事記で有名な大蛇退治の話ですけれど、日本書紀の一書の第四と第五と言うのには別の話があります。天上界を追放された素戔嗚尊は、自分の息子の五十猛命（いたけるのみこと）と親子二人で、普通は出雲へ降りてくるはずですが、この説は新羅の国の曽尸茂梨（そしもり）に降りた。しかし、そこは私は住みづらい。住む所じゃない。そう言って土で船を作って親子で乗って玄界灘を超えて出雲の国にやってきて、斐伊川を遡って船通山へやって来た。そしたらそこに人を食う大蛇がおったので、その大蛇を退治したというようなことが書いてあるんです。全然ストーリーが違いますが、しかしこれは大事なことでありまして、素戔嗚尊が韓の神様、朝鮮半島から来た神様だと言うことを暗示しているようなものであります。始めに五十猛命は木の種をいっぱい持って降りてこられた。それを韓の国では蒔くことを止めて、そのまま持って戻って、日本の国へ戻ってから、九州からずっと全国にかけて蒔かれた。そして、青い山々が出来たのだと。なるほど韓国の方へ行くと今の大統領のお父さんが大統領の時に朝鮮の全山を青くするような運動があったそうですけれど、でも前に行った時には禿山がいっぱいありました。やっぱりそうだなと実感しました。だから日本へ帰ったら緑の山々でしょう。これを五十猛命ら３兄弟で蒔いたと。この、木を植える、木の種を植えて青山にすると言うことを、素戔嗚尊やらその息子の五十猛命がおやりになったと言うことを、このことを実は今、現実に行われております。例えば出雲市だって、おそらく上流で水を確保する為に木を植えると言うことをやっておられるでしょう。

出雲に限らず、大体都市というのは沿岸部にありますから、水が欲しい。そのためには上流の方の水を含ませるように木を植えないといけない。そういうので木を植える運動をされています。それから全国の地方銀行の協会なんかでも、今は京都銀行が会長で、山陰合同銀行が事務局になっておられますが、全国へ木を植える運動を展開しておられます。まさにそれは、素戔嗚尊がやったことを現代にやっておられることであります。昭和40年代くらいには松江には「けやきの会」というのがありまして、民間の団体でしたが、盛んにけやきを植えるということをやっておられました。どうも出雲地方には、木を大事にし、山を大事にするという伝統が昔から神話の通りに残っていて、現実にもそういう運動が展開されています。

残念ながら時間切れになりました。もっとこの他に、神社が多いということ、祭礼があるということ、神楽の問題、酒文化、石神信仰というように続くわけでしたが、もう一時間ほどいただけたらよろしゅうございましたが、残念ながらしっぽ切れになりました。

結論として、温故知新を中心にして話をして欲しいと言われて、故きを温ねて新しきを知る、その気持ちで今やって、そしてロータリアンに何か託するものがあったら何を託したら良いかと言うことも合わせて述べよという事でした。それに必ずしも添うような話ではありませんでしたが、古代の神々の教え、そういうものを現代に最も今必要なものではないだろうかと言うようなことを申し上げたつもりでございます。

ご清聴ありがとうございました。

閉会セレモニー

ガバナー講評	ＲＩ第2690地区ガバナー	佐藤芳郎
次期ガバナー補佐紹介	第５グループガバナー補佐	高橋和男
次期ガバナー補佐挨拶	次期第３グループガバナー補佐	石倉貞昭
	次期第４グループガバナー補佐	渡部　孝
	次期第５グループガバナー補佐	岡﨑政助
閉会宣言	第３グループガバナー補佐	米田則雄
閉会点鐘	第４グループガバナー補佐	岸　篤彦

ガバナー講評

国際ロータリー第2690地区
ガバナー

佐　藤　芳　郎

良いお話しをたくさん聞かせていただきました。私は岡山から参りましたので出雲の話しをほとんど知りませんでしたが、今日のテーマにもありますように「出雲文化がロータリアンに託すもの」という壮大な、底の深いお話しをしていただいたと思います。

特に、第４グループの皆様にとりましては、出雲は地元でございますので出雲の文化を地域で広め、残していかれることと思います。第３グループ、第５グループの皆さんの中にも、もしかしたら出雲の文化を残すべきお立場にある方がいらっしゃるかもしれません。その場合にも是非とも実行していただきたいと思います。

ラビンドランＲＩ会長は、地域の中でギフトを必要としているところを探し、それで皆さんがギフトになってくださいと言っています。どんなに小さいことでも結構ですから、ギフトの必要のある地域を探してギフトになろうというのが今年のテーマでございます。今日のお話を聞いて、出雲の文化が皆さんに託してくれたものをよく理解し、それを今度は皆さんが地域に残して、伝えて、あるいは発展させていくことが一番重要なことだろうと思いました。あとは皆さん方が個々に、今日の話をよく理解していただき、進めていただければ誠に有難いと思います。

神話のある国の皆さん、ロータリーは残念ながら神話の無いアメリカで発祥いたしました。ただ今111年目であります。日本のロータリーは来年で100年、今年は99年目であります。神話はありませんが同じような、心を伝えていくことを重要視しております。是非とも皆さん方もロータリーの心を伝え、そして地域に良い奉仕をし、その次には国際的な奉仕、あるいは青少年に対する奉仕、もちろん職業奉仕も一番根幹でありますから忘れてはなりません。そういうロータリーの心をあちこちに広めていただきますようお願いしたいと思います。

この後の懇親会では、皆さんのクラブ、あるいは皆さんお一人お一人が、今年度一年間どんな奉仕活動をし、あるいはどんな気持ちで奉仕をしてきたか、そういうお話し合いもしていただいて是非とも本年度記憶に残るよい年度になるようにしていただければ幸いと思います。

大変いいお話だった、あるいはいいＩＭだったということで講評とさせていただきます。

ありがとうございました。

次期ガバナー補佐挨拶

次期第３グループガバナー補佐

石　倉　貞　昭

第３グループ次期ガバナー補佐を受け賜っております松江しんじ湖ロータリークラブの石倉でございます。よろしくお願いいたします。

来年度のＩＭは第３グループで担当させていただき、来年２月19日（日）松江のホテル一畑において開催することにしております。内容につきましては今後、ホストクラブの松江南ロータリークラブさんと色々打合せをして決定していきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

次期第４グループガバナー補佐

渡　部　　孝

第４グループ次期ガバナー補佐を命じられております。補佐の仕事はクラブと地区を強く結びつけることではないかと思っております。次期のＲＩテーマは「人類に奉仕するロータリー」で、ロータリー財団はちょうど100周年を迎えます。

私は今日の講演を聞いて、神話の国づくりとロータリーの奉仕活動はイコールであると感じ、神話の考え方を大事にしていきたいと思いました。

先輩諸兄のご指導を賜り、務めていきたい考えでおりますので、ご協力よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

次期第５グループガバナー補佐

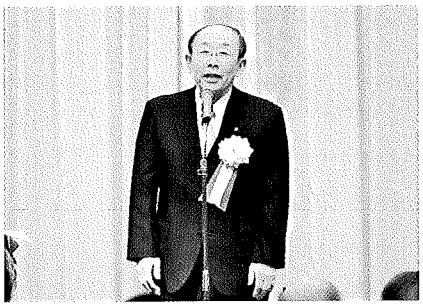
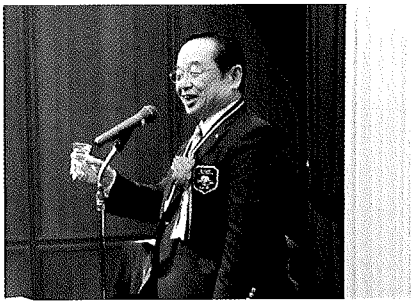
岡　﨑　政　助

益田西クラブから次期ガバナー補佐として選出されました。益田西クラブは27名の小さなクラブですが、昨年は松本ガバナーを輩出し、クラブの一人一人が何倍も力を尽くしてガバナーを支えてきました。

ガバナー補佐の研修をこれまでに２回終えて、庄司ガバナーエレクトの思いがひしひしと伝わって来ております。その思いが少しでも実現しますように努力していきたいと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

懇親会

	司　会	北脇樹二
開宴挨拶	ＩＭ実行委員長	古瀬倶之
乾　杯	ＲＩ第2690地区ガバナー	佐藤芳郎
寄付金贈呈	出雲中央ロータリークラブ会長	池淵俊雄
食事歓談	演　奏	熱田修二
閉宴挨拶	ＩＭ副実行委員長	山根一生
ロータリーソング「手に手つないで」	ソングリーダー	廣原俊平
万歳三唱	パストガバナー	山本茂生

ＩＭ登録者数（2015−2016年度）

	クラブ名	登録者数
第3グループ	松江ロータリークラブ	29
	松江東ロータリークラブ	42
	松江南ロータリークラブ	43
	松江しんじ湖ロータリークラブ	25
	隠岐西郷ロータリークラブ	6
	小　計	145
第4グループ	平田ロータリークラブ	45
	出雲ロータリークラブ	49
	出雲中央ロータリークラブ	47
	出雲南ロータリークラブ	64
	大社ロータリークラブ	56
	小　計	261
第5グループ	江津ロータリークラブ	18
	浜田ロータリークラブ	24
	益田ロータリークラブ	16
	益田西ロータリークラブ	13
	大田ロータリークラブ	10
	小　計	81
合　計		487

来賓・役員紹介

国際ロータリー第2690地区ガバナー　**佐藤芳郎**〈岡山南ＲＣ〉

国際ロータリー第2690地区パストガバナー　**山本茂生**〈出雲南ＲＣ〉

第３グループガバナー補佐　**米田則雄**〈松江東ＲＣ〉

第４グループガバナー補佐　**岸　篤彦**〈出雲中央ＲＣ〉

第５グループガバナー補佐　**高橋和男**〈益田ＲＣ〉

次期第３グループガバナー補佐　**石倉貞昭**〈松江しんじ湖ＲＣ〉

次期第４グループガバナー補佐　**渡部　孝**〈出雲ＲＣ〉

次期第５グループガバナー補佐　**岡﨑政助**〈益田西ＲＣ〉

ロータリーソング

奉仕の理想

奉仕の理想に集いし友よ
御国に捧げん我等の業
望むは世界の久遠の平和
めぐる歯車いや輝きて
永久に栄えよ　我等のロータリー

手に手つないで

1．手に手つないで　つくる友の輪
輪に輪つないで　つくる友垣
手に手　輪に輪　ひろがれ　まわれ
一つ心に　おゝロータリアン
おゝロータリアン

2．手に手つないで　つくる友の輪
輪に輪つないで　つくる友垣
手に手　輪に輪　ひろがれ　まわれ
世界とともに　おゝロータリアン
おゝロータリアン

Rotary